俺は時々軒下にへたばつては休んだ。
目は窪み、鼻は俺自身の腐敗した内臓の臭氣を嗅いでゐた。
荷馬車や自轉車や、下駄や靴がひつきりなしに通る。
俺は立ち上つて又歩るき出した。
電車にも少しばかり乘つた。
梅田へ着いた。
自動車を何十臺となく縱横にならべてゐやがる。
俺の歩行を亂そうとする樣に車夫が、蜂のやうに群れてゐる。
危ぶない〳〵。
俺は人垣を越え、柵を飛び越えてプラツトホームに立つた。
彼奴が人類に言ひ付けて、俺を拘束して鑵詰にして何處かへ運ばふとしてゐる。
俺は走つた。
急行でも普通でも、上りでも下りでも何でも構はない。